

鹿児島県出水平野におけるツル類の基礎調査 第8報

「ツルと人間と共存するためのありかたに
ついての意見」・意識調査について

千 羽 晋 示*

Studies of the Cranes in Izumi Kagoshima, Japan. 8.

Inquiry about the Coexistence of the Human and the Cranes.

Shinji Ciba*

この報告は、人間生活との係わりで社会問題となっているツル類について、将来とも共存していくためにどのような方策を考えていったら良いかなどに関する意見を、この問題に関心をもつ方々を対象におこなった結果である。

ツル類の問題とは鹿児島県出水市荒崎地区に越冬のために例年渡来しているツル類と地元住民との係わりの中で、これまでもしばしばマスコミの話題にのぼり、それに対して様々な形での対応がなされてきている一連の問題のことである。

本報告を記すにあたり、このアンケートを会員に送付することをこころよくお許しいただいた財団法人日本鳥類保護連盟および長崎県生物学会、また、ご回答をおよせいただいた前記会員の方々に深く謝意を表します。

1. アンケート設問の内容

設問は、葉書に印刷し、設問の内容は、次のとおりである（第1表）。

アンケートには、回答者の氏名、住所、年令の記入を求めたが、設問の内容が直接利害関係などにかかわっていたり、まだ、そのことを考えるための基礎的調査の半ばで、結果がでていない段階であることなどから、記入者が自由に意見を述べられるようにと、発表に際しては、特に名前を伏すことを明示した。

2. 送付先と発送数など

アンケート送付対象は、先にも記した財団法人日本鳥類保護連盟の会員で、九州地方から四国、中国地方と徐々に北に向かい、日本海側では新潟県、太平洋側では静岡県までの地方に在住の方々、および長崎県生物学会の会員の方々である。

発送方法は、「ツル類の生息状況に関するアンケート調査」の調査票を送付する際に本印刷した葉書を同封し、返送していただく方法をとった。

* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum.

東京都港区白金台5丁目21番5号

第1表 設問の要旨と回答記入欄（葉書の裏面）

ツルと人間と共存するためのありかたについて ご意見をお聞かせ下さい	
御住所	
御氏名	(才)
九州地方にツル類が飛来していますが、病気が発生し絶滅のおそれがある。また、農作物に被害を与えと言われる、大きな問題になっています。	
その為、分散した方がよいとか、いろいろ言われていますが、今後、人間とツル類が仲良く共存して行くためには、どうしたら良いのか、貴方のお考えをお教え下さい。	
(記入欄 余白)	
貴重なご意見ありがとうございました。	
お名前は発表しませんが、私共の名簿に登録し、今後の資料にさせていただきます。	

送付枚数は、999枚で、昭和61年10月に発送し、同年12月までに回答を求めたものである。

3. 集 計 の 結 果

(1) 回答数と内訳

調査用葉書の返送数は、249通で、回答率約25%であった。

回答者の県別、年令別の内訳は、次のとおりである。

① 県別回答数内訳（回答数の多かった順に示す）

長崎県（48）、福岡県（35）、広島県（16）、熊本県（12）、大分県（11）、鹿児島県、大阪府、兵庫県、徳島県（各10）、宮崎県（8）、山口県、滋賀県（各7）、新潟県、長野県、石川県（各6）、佐賀県、島根県、岐阜県（各5）、静岡県、沖縄県（各4）、島根県（3）、香川県、高知県、富山県、愛知県、三重県（各2）、岡山県、和歌山県、愛媛県（各1）、不明（8）となっている。

② 年令別回答数の内訳

10才台（9）、20才台（16）、30才台（40）、40才台（36）、50才台（57）、60才台（52）、70才台（25）、80才台（1）、不明（13）となっている。

回答数の少なかったのは、地域が限られている出水市荒崎地区の問題であり、マスコミなどで報道されているとはいいながら、あまり多くの人々に周知されていなかったと思われること、また、自分の身のまわりの問題でないため、関心が低かったこと、関心があっても問題が複雑なだけに、意見としてまとめ難かったことなどが考えられる。

このことは、回答中にもしばしば見受けられ、意見として記されていた。

送付先の枚数は、県別で異なっているが、九州地方、中国地方のツルの飛来地をもつ地方からの回答が多い傾向を示しており、関心の高さがうかがえる。しかし、四国地方からの回答は少なかった。

年令別では、50才台、60才台の回答が多く、以下30才台、40才台、70才台の順となっている。

これらの意見をみると、とくにツル類の被害というのではなく、鳥獣害全般として実際に係わりをもった方々が多く、関心の高さがうかがうことができる。

最少年令は13才、最高年令は83才である。

(2) 集計結果の分析

回答数は少ないが、とりあえず全回答者の回答内容を一読し、複数の人による意見を項目別にまとめた。

回答者とツルとの係わりでは、直接係わりをもたない方の意見がほとんどいい。

その点、本アンケートの結果は、一般の関心をもつ人々の集約された意見とみてよいであろう。

ただ、集計をしている段階で多くの人々の意見が同じ内容で託されている傾向がみられたことは、もう少し多様なまとまりのつかないものになるのではと考えていたので意外な結果となったことである。

それは、設問のしかたが具体例を示すようなものであったため、どちらかという設問の例として示したことにこだわった形になったのではという危惧がある。

以下に回答の集計を項目ごとに記す。

「ツルと農作物とのかかわりについて、農作物に被害を与えることについてどう考えるか」

① 補償、買いあげなど、金銭で解決する意見。(47名)

農耕地などツルの生息に必要な地域は買いあげて、国や地方公共団体、または、ナショナルトラストのような形などで、とにかく管理団体を特定して管理する。

または、飛来時の冬季のみ借りあげて管理する。

農作物の被害に対しては、迷惑料のような形で補償する。

② 人工的な餌場を与えることにより、農耕地を守る。(9名)

餌場にひきつけることで農耕地に侵入しないようにする。

また、現在の餌場を上げたらいよいよといった2つの意見があった。

③ 農地での被害は止むを得ない。あまり人間中心に考えずに大きな心をもつこと。(3名)

人間による生活の形態(農耕も含む)の変化が、逆にツル類の生息条件に対して影響与えている部分も多い。

過去をふりかえり、もう少しおらかな心をもつべきである。

④ その他。(7名)

特定の水田所持者にのみ負担をかけないような施策が必要である。

一方的な保護論者だけの意見を聞いて対応することには疑問がある。また、もう少し動物全体の保護について基本的に考える必要がある。

自分自身の経験からサル为例をあげ、数が増えることにより被害が増加しているが、自分の畑は自分で守り、仲良く共存(?)しながら50年余り暮している。

出水のツルは過大な報道がなされることが多く、行政も住民もお互いに尻込みする傾向がみられるので、お互いの協力が必要であるといった意見もある。

「ツル類の管理の方法などについて」

① 自然環境の保全、回復につとめることが、先ず最初に考えるべきことである。(66名)

これらの意見の中には、農地に適さない場所、休耕地などの活用、沼池、湿地、干潟などの利用を考える。

さらに、自然公園、サンクチュアリーなどの設置をすすめる。

その他、ツル保護のための生息適地を探すことを積極的にすすめるなどといったものがある。

② ツルを分散させて保護をはかるべきである。

(i) ツルを人為的に分散させ保護する。(10名)

ツルを捕獲して他の場所に移すことを考える。具体例として、捕獲して人工飼育をするツルセンターをつ

くり、その後放鳥するといったことなど、詳細な手順を記したものもある。

また、具体的に分散をおこなう場合、また、渡来経路の途中の地域に給餌で留める方法で地名をあげられた方が34名あった。あげられてあった地名は、観音寺、諫早平野、島原平野、雲仙、河浦町、阿蘇の盆地、阿久根、佐渡、出水市の現渡来地の反対側の乾田、出雲平野、鳥栖、石川田鶴浜、加古川平荘湖、有明海干拓地、加世田盆山、吉野川流域などである。

(ii) 人為的な分散はさけるべきである。(3名)

一か所にツルが集まってくることは、日本の誇りである。渡ってくる場所はツルが決めることであり、いろいろ問題も多いと思うがツルの状態にあわせて考えるべきである。

土地の借りあげの費用は、広くカンパすることを考える。

人為的な分散は不自然である。人間による分散などは、かえってツルに悪い影響を与えることが考えられる。

(iii) これ以上ツルを集中させないために餌を減らしたり、中止し、自然に分散させたほうが良い。(7名)

病気の発生によるツルへの影響に比較すれば、給餌を減らしたり、中止して一時的な混乱をまねいても、犠牲にははるかに少なく、むしろ、将来により結果がでると考える。

渡りの途中の地域で給餌をして、その地域にとどめる方法を考えると良い。そのためには、出水での給餌を減らすなどのことを考えておこなう。餌があるから増えていると思う。

給餌以前にもどって出発点から考え直す必要がある。そのためにも給餌の量を減らすか、中止するといった、給餌についての意見がある。

「その他の意見について」

① ツルについては、さらに観察や研究をすすめる。同時に保護教育の面での推進をはかる。(53名)

人間は自然界の一員であることなど、生態系のバランスなど、といったことについて、もっと多くの人に理解してもらうよう、保護思想の啓蒙、教育を積極的におこなうべきである。それには、国の機関がまず率先しておこなうべきである。

② ツルを過保護にしない。(18名)

生態系のバランスや自然淘汰の原則などを重視し、あまり人為的な操作はせず、長い目で見守ってやるのが大切なのではないか。

③ 管理の方法として、国民にカンパをしてもらう。(15名)

観光客などに対しては、保護区への出入りを有料にすること。また、物品の販売などの利益、寄付を求めするなどして、土地の補償などの財源にするといった管理方法をのぞむ。

④ ツルに対して刺げきの行為をしない。(7名)

保護区への立ち入りの禁止、ツル飛来時の報道をひかえるなど、人間による接触をなるべく少なくすること。

「その他、まとまった項目としてとりあげられなかった意見」

人間が勝手に線引きをしてサンクチュアリーを決めるのは論外である。

現在以上の農地などへの転換を止める。

保護区を造り人工的に徹底した管理をする。

減反にだす金があったら、離農にだす金があっても良いのではないか。

被害報告は、為にせんとするものが多いので無視してもよい。

人間の欲望のためツルを犠牲にしない。

病気の発生に対しては、ツルの渡去後にその場所を消毒する。

適正な数を維持するための調査を管理をする。

観光化してしまっているのが混乱の原因である。

利益が偏っているので管理上の理解を得るのは難しいと思う。

ツルの病気に対してどの程度研究がすすんでいるのか。

保護とか、絶滅を防ぐとかは、人間の思いあがりの何ものでもない。歴史をふりかえる必要がある。

人間がツルの習性を変えることはできない。

今はとにかく保護するしかないのでは。

一般的に、出水のツルのことを知っている人が少ない。もっと良く周知することを考えるべきである。

ツルの研究をする研究所を国がつくり、管理などの方法を考える。

金の問題であり、資金の裏付けのない自然保護は何の役にも立たないし、自然との共存のテーマも空論にしかすぎない。

ツルだけでなく、有害鳥獣が最近増えて困っている。もっと全体的なことを考えて欲しい。

田畑に農薬などの散布することを止めて、ツルの生息に適した環境づくりをする必要がある。

観光資源としてつかうことを止める。

以上のような意見がよせられている。

4. アンケートの集計を終わって

回答をまとめている段階で、まず気のついたことは、出水のツルについて知っていた方が非常に少なかったことである。

また、知っている方でも、どのような形で管理させているかということになると、すべてボランティアのような形態でおこなわれていると理解されているようであった。

このことは、アンケートの集計結果をみていただければわかるが、現在出水のツルについては、文化庁が農地を冬季借りあげていること、餌の購入費などなど、年間かなりの経費が国、地方公共団体からでていること、実情があまりにも知られていない。

この点については、もう少し現状をひろく周知させる必要があるように思われた。

「ツルと農作物とのかかわり」の項では、補償あるいは買いあげるという意見が回答数の約19%を占めていた。

しかし、少数意見ではあるが、人間によるツルへのインパクトが基本的には問題であるということが記されており、また、ツルだけでなく、動物全般を対象にした意見が比較的多く見受けられた。

とくに、マスコミの報道と行政、住民とのかかわりをついた意見、自分自身の経験にもとづいた共存の考え方も興味のある意見であった。

「ツル類の管理の方法」では、自然環境の保全、回復を求めた意見が約27%あったことは注目すべきことであろう。

また、具体的な分散方法については、人為的分散方法の賛成、反対がほぼあい半ばしていた。

この中で注目されたのは、現在の給餌と集中化を結び付け、給餌量の減少、中止といったことによる方法の意見があった。

このことについて考え方として、原点にかえて考えるためにおこなう、分散させるためにおこなうという二つの考え方がある。

そのためには少々の犠牲は当然で、病気によるマイナスより小さく、むしろ将来展望を考えれば良い結果

がでるといったことである。

「その他の意見」では、自然保護、自然教育の推進を求める意見が多く約21%を占めた。

この他に、基本的には国が中心になって施策をおしすすめていくことが求められており、ボランティア、民間組織、団体への依存度は低かったことである。

今回の結果は、設問のまずさなどで系統だった集計ができなかったが、そのかわりに、自由な意見をうかがうことができたと考えている。

今回の結果を反省し、改めて設問を練り直したうえで再度ご意見をうかがうことを考えている。